まえがき

１９８７年、アメリカのカリフォルニア州デービス市にあるビレッジホームズを視察した時、それはただ驚くばかりだった。随所のデザインがエコロジカルな思想で徹底されている新しい住宅地づくりももちろんであるが、まわりが様々な種類の果樹で彩られている、その豊かな感じに包まれている気分というものが不思議であった。都市でいて都市でないような。これがサステイナブルな住宅地というものか、と。これら食べられる果樹や共同の菜園などの環境の説明で Edible Landscape という言葉を頻繁に聞き、気になっていたところ、同行していた宇都宮大学の藤本信義教授がこれは「食べられる景観」と言うのかな、と言ってきた。「食べられる景観」という言葉の響きに興味が引かれた。包まれた豊かな感じにぴったりしたのである。住宅の裏庭につながるセミ・コモンの間をぬって遊歩道を歩き、多様な種類の果樹をみながら、案内してくれた M.Francis 教授がこのようなものは日本にあるかね、と聞いた。私は新しいものではないが、日本の農村を歩くとこのような所はある、ととっさに答えた。農村調査に関わり農家の裏庭を連なるこのような道を歩いたときに感じた同種の感覚を思い出していたのだ。もちろん質問の主旨は違ってビレッジホームズのような設計思想で造られた住宅地を指していたのであり、質問した彼はけげんな顔をしていた。

しかし、このような管理の作業に住民が関わり、それらの共同作業の後にはワークパーティーといって持ち寄りの身近に採れたものを使った手作りのケーキや果実酒で宴会をするところは日本の農村と似たところがある。「食べられる景観」はそんな人間関係にも影響を与えているのではないだろうか、とも以降考えるようになって、いつかこの研究をしてみたいと練っていた。食と文化、都市と農村、子どもと自然、公と私など、実はこのキーワードから派生してくる問題は幅が広い。そこで何人かの仲間の人たちに協力をあおぎながら自主研究組織「エディブル・ランドスケープ研究会」を立ち上げた。そこに当財団の研究助成を知り、応募して助成を受けられたことは研究におおきな弾みをつけることになった。またこの助成で行ったアンケートは回答者側からも共感を得たようで多くの励ましの言葉をいただいた。さらにホームページを見た人からも多くの情報が寄せられた。

なお、本報告書の執筆には財団に申請した研究メンバー木下・藤井の他に、座談会に参加してきた研究会の仲間にも以下の部分に協力いただいた。

執筆協力：	林 のり子	＜食＞研究工房 主宰	Ⅲ－３
	結城登美雄	民俗生活研究家	Ⅲ－４
	森　まゆみ	谷根千工房主宰 作家	Ⅲ－５
	望月南穂	(有)ワークショップむぎ 代表取締役	Ⅲ－６、Ⅳ－４、Ⅳ－５
	吉川　仁	(有)防災&都市づくり計画室 代表取締役	Ⅲ－７、追補

その他の本文は藤井がⅢ－１を担当し、残りの部分は木下が執筆した。もし文章に問題や不十分な点があれば、それはひとえに主査の木下のいたらなさであり、ご批判いただきたい。

この報告書が多くの人の協力によってまとめることができたことに感謝の意を記す。

1999年3月31日　　(文責：木下)

「エディブル・ランドスケープによる居住環境の再評価」研究グループ
木下 勇　(主査・千葉大学園芸学部 助教授)
藤井英二郎　(委員・千葉大学園芸学部 助教授)